

富類編

昭和十一年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十一年二月廿一日印刷(毎月一回)
一連編(第百十二輯)第十一卷二月號



一キ一ト念記出進都京門衛太右

道街世出姿初

武市山山千廣新中天天高光葵志	岡市川
井川口路曲田妻村野堂川賀	田川右
助龍右義里四園双國京令靖	嘉太
演三門勝人子昂郎枝一典子子郎	子衛
	門主
	演
郎春川瀨	作原
郎二鏡木並	色脚・色潤
郎太鏡岡片	督監
清	ラメヤキ

岡市川
田川右
嘉太
子衛
門主
演

切封旬中月二



松竹キネマ大阪支店

風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節向御料理

佛蘭西御料理

芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

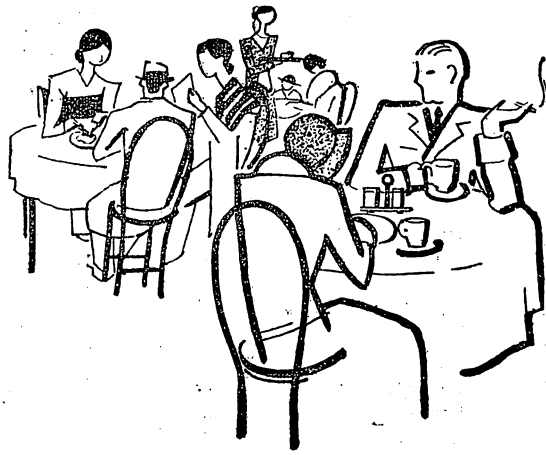
道頓堀戎橋北詰

御芝居の歸りには打ち揃ふて

お座席では是非御會食を！

支店

- 大阪支店
- 心齋橋筋八幡筋角
- 北新地裏町
- 京都支店
- 木屋町ドングリ橋





◆道頓堀。第十一年。二月號 第百十三輯◆

★ 口 繪 ★

◆南座。井上の三藏。水谷の里野◆歌舞伎座。扇雀の土屋主税。成太郎のおその。
勘彌の大高源吾。扇雀の忠兵衛。勘彌の狂言師右近。我當の松王丸。扇雀の武部源藏。
松進の女房千代。鶴之助の女房戸浪。我當の與次郎。扇雀の傳兵衛。鶴之助のお俊。
勘彌の六つ又和四郎◆中座。十吾のヘン助。天外のピン助◆角座。都築の傳吉。梅
野井のお松。中田の繪師谷部。六條のおみの。小久保田の胡魔の蠅◆浪花座。辻野
◆新撰組時次郎。エンタツ。アチャコ。堤眞砂子◆南座。水谷の唐人お吉。藤村の喜
兵衛。井上のお民。水谷のお島◆關西大歌舞伎(巡業)。延若の木下藤吉郎。壽三郎
の岡田以藏。長三郎の大石主税

◆ 表 紙

長谷川小信氏所有
延若の忠兵衛

名優あれやこれや譚

日比繁次郎 (三)

今賣出四人男

菱田正男 (四)

お富と與三郎

高谷伸 (七)

我當勸彌扇雀に望む

森ほのほ (六)

作者から見た

井上正夫の女役

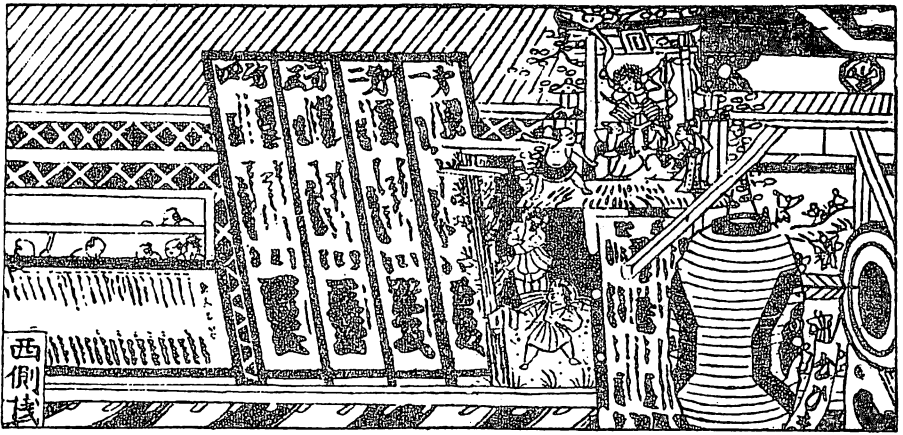
龜屋原徳 (二)

歸阪に際して

中村扇雀 (四)

五ヶ月振りに

辻野良一 (一)



辻野良一を語る……………小堀雄 (七)

「たった一人の女」…(芝居見たまま)……………小野千鶴 (八)

「海鳴り」…(芝居物語)……………森野高子 (三〇)

「私の女房役と劇團の變轉」(4)……………都築文男 (三)

演出五十冊記念の

山上貞一先生を訪ふ記……………上田口猿子 (二〇)

歌舞伎座と角座…(一月の芝居)……………西尾福二郎 (三七)

その時折りの記……………大橋孝一郎 (三〇)

扇雀我當勘彌へ……………高安吸江 (三八)

私の好きな台詞……………(三三)

村田嘉久子、實川延若、坂東鶴之助

片岡我當、山口俊雄、市川松延

松本高麗五郎、藤村秀男、守田勘彌

水谷八重子、澤村田之助 (次第不同)

漫 畫……………大槻たもつ (三三)

鷹治郎一週忌法要……………山中虹二 (三三)

カ ツ ト……………村上勝

編輯 後 記……………村上勝

天下之銘酒

シ
ラ
ユ
キ

白雪

清楚な味

陶然たる酔

摂津 伊丹・灘

小西酒造株式会社





劇 同 合 の 座 南 京

ピンコの (野里)谷水 (藏三)上井 「歌 琵琶」



「土屋主税」

土屋主税

扇

雀

侍女おその

成太郎

彌

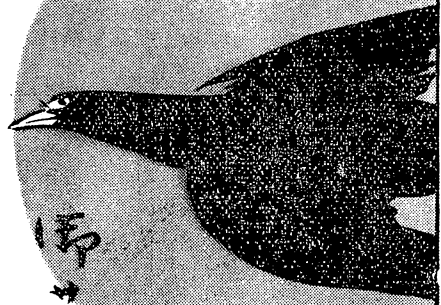
大高源吾

勘

彌



割烹



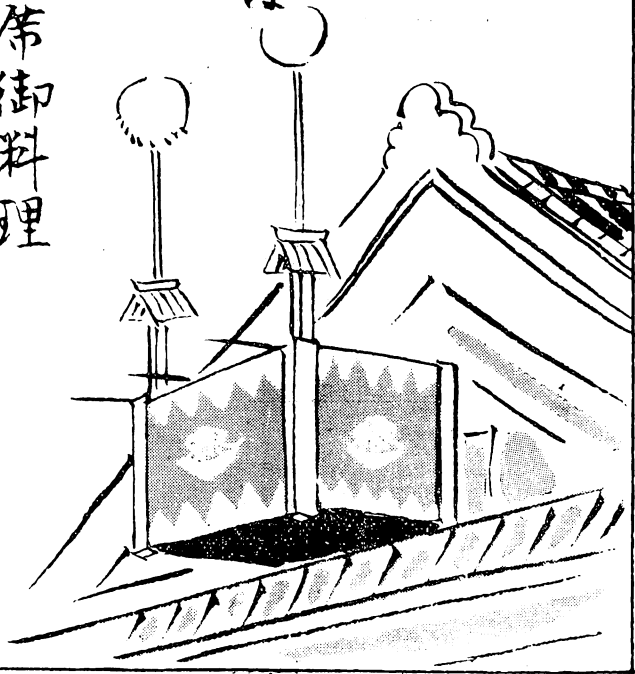
師芝居のや歸には
是非日柄を長へ

會席御料理

南地

日づのらと坊

電話南 一八七六番



金鶏印罐詰 二大製品

- 1. 純良精選の牛肉
で御座います
- 1. 不意の御來客に
- 1. 御酒ビールの御友に
- 1. キャンピングに
- 1. ハイキングに
- 1. 各地百貨店
著名食料品店
に販賣致して居ります
- 1. キンケイ印を御指定下さい



洋酒・飲料水・罐詰

株式会社 横山商店

大阪東區豊後町三

「戀飛脚大和往來」

龜屋忠兵衛

扇

雀



— 二月の歌舞伎座 —

「連獅子」

狂言師右近

勘

彌





「鑑習手授傳原菅」

當	我	丸王松人舍
雀	扇	藏源部武
蕙	松	代千房女丸王松
助之鶴		浪戸房女藏源

「近頃河原の達引」

猿廻し 與次郎 我 當



井筒屋 傳兵衛 扇 雀
與次郎 妹 お俊 鶴之助

— 二月の歌舞伎座 —

『たった一人の女』

六つ又和四郎

勘

彌



— 二月の歌舞伎座 —

當 我 丸 王 松

雀 扇 藏 源 部 武 「鑑習手授傳原菅」

林檎の汁から醸したシャン
パンです、味……香り……
軽い酔ひ心地……すべて快
適である上に林檎の栄養を
完全に保有してゐて、健康
のためにも推奨すべき新飲
料です！



林檎ヤシパン

ポパン



「奴ンビンハ」スンセンナ代時

助ンビ 奴の外天 助ンハ 奴の吾十

一月下旬公演の

「鬼神のお松」

都築の 富田屋の傳吉

梅野井の お松



劇派新西關のみ染馴おで座角

「旅の髭ひ拾妻」は上

田	中	峰	一	谷	師	繪
條	六	ち	み	お	屋	口
田	保	久	小	六	甚	蠅
						の
						麻
						胡

流行歌

宿場がすら



橋本一郎

時雨村大
作曲 羽音草

彼女の女



新橋喜代丸

西岡水朗
作曲 行士岡片



ドーコレイハイタ

流行歌

ちついで



東京小

藤原山彦
作曲 一郎部長

春の口笛



奥田英子

草笛道郎
詞 彦山原藤



ドーコレートツニ

第十一回新譜

管絃樂

レハール幻想曲
アルペドバイエル指揮
ウイーン交響管絃樂團



美人も四十になれは
フィリス・ロビンス

ダンスミュージック

あのギター
を聴かずや

フラウツス雨の中に
ジエイ・ウイエルバー楽團

浮気投合さ
意気投合さ
アルファ・マルタン
歌唱ジャン

愛の言葉を
教へてね

別れの涙が
歌うジャン・ペイナル楽團
ジャック・ペイナル楽團

ドーレルクス

日本音楽株式会社

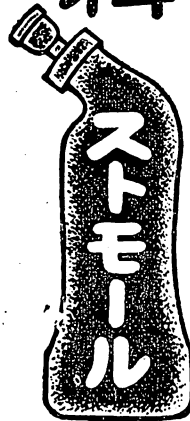
醫學博士 辰己庄太郎氏 推獎
醫學博士 倉田包雄氏 創製

濃厚原料 (百倍ニ稀釋)

(有名藥店及ビ
デパート藥品部ニ有リ)

吸入 含嗽

原料



咳止 殺菌 消炎

含嗽トシテ

吸入トシテ

扁桃腺炎、咽喉加答兒、口内炎、齒槽膿、漏口臭症、臭鼻症
 病人ノ口中ヲ清潔ニスル目的
 從來過酸化水素ノ含嗽劑ノ様ニ口ノ中ノ粘膜ヲ刺激スル様ナ事ガナク無刺戟デア
 リマス。然モ過テ飲ミ下シテモ無害デアリマス。含嗽シマスト心地ヨイ香氣ト快
 味ヲ覺ヘ清爽ノ感ガシマシテ氣分爽快トナリマス。即チ含嗽劑トシテ萬點ノ性質
 ヲ具有シテ居リマス。

寒胃、百日咳、氣管枝炎、肺炎、結核等ノ咳嗽ヲ發スル疾患ニ對シ「ストモール」
 ノ百倍溶液ヲ吸入器ノコツブニ入レ一回ニ杯宛一日二―六回吸入スレバ良ク其ノ治
 療及豫防ノ目的ヲ氣持良ク達シマス。

定價〔小〕約十五日分 (吸入含嗽液三千瓦ヲ造ルヲ得ベシ) 六十錢
 〔大〕約三十日分 (吸入含嗽液六千瓦ヲ造ルヲ得ベシ) 一圓

大坂市東區伏見町三丁目

發賣元 光榮商會

電話北濱三三一五番

行興月二の座花浪

劇闘奮一良野辻

演實のコヤチアツタンエ

は上

野辻の郎次時組探新

は下

「中連たれきあ」



ンサ子砂眞堤のL・C・Pてしそンチャチアにツタンエくなもでまるす明説

新派の代表作

「琵琶歌」

合同劇によつて
涙の舞臺を展く



井上三藏
ののの
谷里野

二月の
南
神戸松竹劇場
座



左「女人哀同」 水谷の唐人お吉

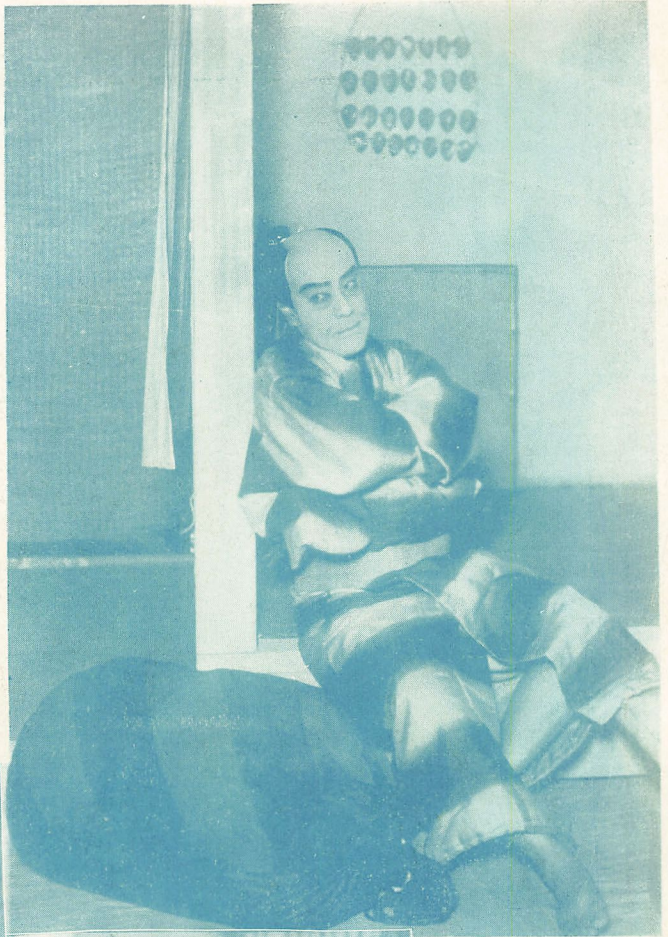


井上が女役をする

「海 鳴 り」

喜兵衛 藤村
 お民 井上
 お島 水谷

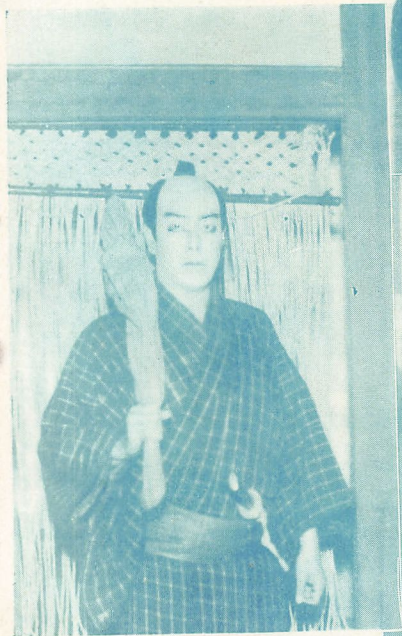
關西大歌舞伎は二月
 上旬神戸松竹劇場を
 振出しに九州方面へ
 巡業する――



延若の
 木下藤吉郎



長三郎の
 大石主税



壽三郎の

岡田以藏

茶

西區女子學校

坐半

電話二六三三



映畫「大東京」製作企劃に際して

全國識者並に七百萬大東京市民の御教示を仰ぐ

我が新興キネマは先年海軍省の御後援に依り映畫「太平洋」を、京都第十六師團御指導の下に「日本若し空襲を受くれば」を製作し又巽に國策映畫製作の精神に立脚して内務省警視廳の御後援を得て「警察官」及「消防手」又近くは鐵道省御指導の下に映畫「鐵路」を逕信省御後援の下に「突破無電」等社會民衆化の趣旨に基き單なる娛樂映畫製作の一營利會社の立場を超越して幾多の特殊映畫の製作發表に依り些か映畫報國の精神を披瀝する處ありたりと秘かに自負するものなり。然るに今や世界の列強は夙に映畫國策樹立の政策に出で着々其の實現を見、我國又映畫の國家的重要性を認め這般官民合同協調の下に社團法人大日本映畫協會の誕生を見に至りたるは邦家の爲め誠に欣快に堪へざる處なり。

茲に於て我社は之が記念の精神を表明し併せて我社が現代劇部移轉東京撮影所の完成と我が新興キネマ第一封切場として帝都の中央に一大映畫殿堂「大東京」の閉館せしを記念して茲に映畫國策樹立の見地より萬古に不朽の大映畫を製作し以て世に贈らむとするものなり。三千年の古、かの殷盛を極めしギリシャの文化は全歐の各地に流入して後世近代ヨーロッパ文化發達の素因を爲せしは世界文化史上に燦なる處なり。我社今茲に現代日本文化發祥の地にして其の現下の中心地たる大東京文化の大觀全貌を映畫化して之を世に贈り以て普く天下の觀覽に供し内は以て僻遠津々浦々の地に迄其の文化の認識と普及に貢獻せんとし外は以て後進諸外國の文化開發の一助たらしむ事を希ひ茲に巨資百萬圓を投じて映畫「大東京」シリーズの製作を企圖するものなり。

就ては之が映畫の完璧理想を期せむが爲め如何なる方法に依り、如何なる種類の製作を順序とす可きか、限られたる豫算を以て最大効果的の五種乃至十種類の範圍を選びたく茲に全國識者並に七百萬大東京市民諸賢の御教示を仰がむとするものなり。例へば映畫「大東京」交通篇「勞動篇」新聞篇「スポーツ篇」産業篇等々の如し。因に論ずる迄もなく大衆に對する普及力の強大なる映畫は大衆の娛樂映畫たるを以て本旨とす。從て其の製作の意圖も所謂記録映畫又は實寫的映畫にては何等の効果無きを以て大衆の嗜好にアツピールする娛樂映畫を主體として之に所謂文化映畫の精神を適當に編録する事に依り其の目的を達成せむとするものなり。仍て此の趣旨に基き優秀なる脚本を提供せられたる向きに對して左記の方法に依り些か謝禮の微意を表せむとす。

懸賞募集規定

- (一) 大東京シリーズ映畫脚本 但し脚本ハ完全ナルシナリオノ形式ヲ備エザル梗概ノミニテモ可ナリ
 - (二) 選者氏名ハ追テ發表ス
 - (三) 宛 先 東京市京橋區八丁堀 新興キネマ株式會社 大東京シリーズ懸賞脚本係
 - (イ) 審査ノ結果入選決定ノ方七名様ニ對シ左記ノ賞金ヲ贈呈ス
 - (ホ) 電話其他ノ問ヒ合セニ一切應ゼズ
 - (ロ) 應募脚本ハ返却セズ
 - (ニ) 審査發表期日 昭和十一年三月十五日
- 一等 金壹千圓 (御一名)
二等 金貳百圓 (御二名)
三等 金五十圓 (御四名)
- 全國識者並に七百萬大東京市民各位
- 新興キネマ株式會社
常務取締役 山崎 修

誌雅・究研劇演・刊内

二月號

通類編

第十一年

第三百三十三輯



延若の忠兵衛



名優あれやこれや譚

日比繁次郎

一代の名優中村鴈治郎を思ひ出す一年が来た、如月の身にしむ寒さを肌を感じるに同時に、ひし／＼と故人の思出が浮び出てくる、すでに幾度か語りもし書きもした。而し語つても語つても、盡きないのは故人の思ひ出である。更にこゝに、近頃の奇しき思出を語らう。舊臘扇雀君が東京の舞臺へ招かれて、明治座で、我當君との一座で紙治の炬燵を出した、本人も張り合ひのある舞臺で非常に緊張してゐてよい出来だつたが、私はその初日の舞臺を満員の見物席の後方から、ぢつと注意して見てゐたが、ふと扇雀君の治兵衛の後ろにモウ一つ大きい治兵衛が影の如く動いてゐるやうな幻想を起して、暫らく私は茫然として心を捉はれてゐるやうな氣持になつてゐたが、やがて我に歸つて思はず慄然とした。さうすると無意識に目から涙が流れて

ゐるのに氣附いた。とりとめもない幻想ではあるが、やつぱり鴈治郎は倅扇雀の影身に添ふて舞臺を守つてゐるのだと思つた。必つとそれに違ひない。毎年の上京に歌舞伎座の舞臺での鴈治郎の緊張ぶりには私はその都度ながら驚かされた一人である。熊谷陣屋で初日以来たいへんな勢ひを見せ、腹の底から揺り上げるやうな大きな調子を出して、三日目に床の越太夫の咽喉をつぶして休場の餘儀なきに至らしめた如き、初舞臺に等しい扇雀君の明治座の舞臺を其父鴈治郎は必つと守つてゐられたに違ひない。こんなことを書いてゐるには際限がないが、序でに故人の思ひ出として澤田正二郎にも一世の代表的俳優としての非凡な點のあつたことを今更ながら偲ばれる。彼が旗上げ當時辨天座の二回興行で、血みどろな苦闘を續け、將來の大衆劇を

目ざして意氣衝天の頃のこと、彼れの樂屋へのつそりと入つて来た座員の田中介二が、何心なく昨日の休日に中座の鷹治郎一座を見て来たといふ話をするや、鏡臺前からくるりと後ろを振り向ひた澤田正二郎、よくも田中に話させぬ先に、險惡な顔をして、君は既成劇團を見て何にしやうといふのか、將來の國民劇を理想に描いて新たに創造しやうとして努力してゐる我々同志が既成俳優の演出を見たとて害にこそ成れ益はないツ、かう云ひ放して澤田は非常に不機嫌だつた。傍で聞いてゐた私は取りなしやうも無かつたので、黙つて傾聴してゐたが、田中君は非常に俏けてしまつたと覺えてゐる、議論の是非は兎も角たいへんな意氣だと感じ、之れは必つと成功すると直ちに確信させるほど其時の澤田の數言は力の籠つたものであつた。

澤田が創始した新國劇獨特の立廻りなるものも最初の間に追がに東京のタテ師升六の附けたものを多少の工夫を加えて見せてゐたのだが、後には次第に寫實式の激しさを加へ、更に又轉化して國定忠治の如き妙味のある立廻りに移つて行つた。この進化過程を見てゐると往年立廻りで賣り出した若い頃の尾上卯三郎を思ひ出す。卯三郎の立廻りは其藝と同じく寫實式で激しい意氣を見せるものだが、これとても圓熟した頃は一種の卯三郎獨特の妙味のある型と云へば型のやうなものを作り上げてし

まつた。その最初の修業時代先輩の嵐璃珪と濱芝居を打つてゐる時分、双方激しい立廻りで賣り出したものだが、一步を長じてゐた璃珪は卯三郎の寫實意氣の立廻りを嘲笑して、或日二人が立廻りの間に、璃珪は卯三郎に、サアもつと來い、もつと來い、と盛んに對手を焦らすやうなことを小聲で云つて卯三郎を困らさうとする、そんなことゝは知らず卯三郎は真正直に璃珪に突つかつて行くので、とう／＼呼吸を切らして了つてへつ／＼に疲れて来た、其處まで引すり込んで置いてモウよしと璃珪は微笑んだまゝ、悠々と舞臺を引き込んで行く、大汗になつた卯三郎は苦しい呼吸をして、これも舞臺を引き込んで行く、其背中を叩いて璃珪は、かう云つた。ナア卯三ヤン立廻りは喧嘩と違ふぜ、さう本意氣ばかりでは續くもんやない。これを聞いた卯三郎後日いつまでも此言葉が耳を離れず、悔やしいが友達の至言に感じ入ると共に其後の立廻りに一層の工夫を加えた、と後によく人に語つてゐたものだが、時代は違ひ演劇様式は變つても、卯三郎の精進道も澤田の練達過程もつまりは精神に於ては同一のものがあつたにちがひはない。而かも同じ土の上辨天座の舞臺から、かうした民衆劇の萌芽を發したのも考へて見ればおもしろく、いつも歴史は繰りかへすものだといふ云ひ慣はしを如實に物語つてゐるではないか。

今賣出四男人

● 男 正 田 菱 ●

「もし吉右衛門や菊五郎がなくなつたら、歌舞伎の將來はどうなるだらうか」とサモ心配さうに訊いた人がある。その人はいまの菊、吉、左のみに重きをおいて芝居を見、劇談を交はしてゐるらしい。その結果は次の時代に歌舞伎を脊負ふて立つ連中など考へても見ないらしい、こゝうした見物はまだくたくさんあると思ふ。

いま劇壇に働いてゐる巨頭連のみが俳優のごとくであつて、それらの御曹子連をはじめ青年俳優連は全然といつていゝほど顧みられなかつた時代が、ついでいゝであつた、むかし菊、吉の青年時代は、田村成義氏の薫育よろしきを得て青年俳優中に既に來るべき劇壇の一方の旗頭たり得る者だとの折紙をつけられたといふが、それはその人の腕と指導者のよさがその名聲をかち得たのはいふまでもない

が、その頃と今とはいろいろな點でちがふ、だからその時代のことをもつて來て「いまの若い役者は拙い」とか、とかく冷評するのは少し可哀さうだ、同時に今日の青年俳優連を萎縮させた罪は仕打側にもある……といひたい、だが、その仕打側もこの點に大いに頭を悩ましたと見え、すでに東京では青年俳優のため種々勉強の機會が與へられ、最近では大阪の若手も大いに重用せられ、若手の東西合同といふ絶好の競演時代をつくつてゐるこれは當に若手のみならず、劇界のためにも大いに喜ぶべきことで、これによつて若手連は往年の菊、吉時代のやうな華やかさを再現し、次の時代を脊負ふて立つ大きな基礎をつくるべきである。

昨年十一月京都南座にはじめて大舉來演した東京の青年俳優連は大阪の若手連と組んで、まったく火の出るやうな劇戦

を演じて大向ふを唸らせた、それが十二月から一月へかけて東京での延長となり更に二月大阪歌舞伎座の大舞臺へつゞけられる、全く双手をあげて快哉を叫びたことだ、願はくはこの好現象が花火線香式でなく、いつくまでもつゞき、若手連を指導鞭撻し、發奮させてくれるであらうことに大きな期待をかけておく。

東西の若手連のうち、東の我當 勳彌、西の扇雀、成太郎の四人について考へた、この四人のほかは東で福助、段四郎、松莚、鶴之助、染五郎、西に狂藏、福助、秀郎、延三郎、福太郎などいろくゝゐるが、それらについては他日に譲るとしてこの四人中でも特に將來へ眼をつけられてゐるのは我當と扇雀ではなからうか。

我當は仁左衛門を父に持ち、「名優の子の大根」といふ蔑稱を甘受せねばならなかつた苦惱時代を卒へ、特に古典物の

研究に力をそゞぎ、その上世話物にはまた得意の演技を見せるといふ重寶さに、「大根の千代之助」から「次の仁左衛門」とまで人々の認識をハツキリ轉ぜしめたその努力はたしかに賞めてやらねばなるまい。「市村座時代の菊、吉はこうくで巧かつた」など、スグ引合ひに出される批評を「何よりも一番辛いです」とこぼしてゐるが、肚中にはその引合ひの言葉をいまより以上自分への賞讃の聲たらしむべく勵んでゐるのはよいことだ、その意氣込みで、ウンと腕をみがくがよい、たゞ若いが故に誤解？ からくるらしい演出上の欠點、大きく見せる上の台詞の間のびや、殊更な大仰な仕科は注意して欲しい。

次に扇雀だ、「親の眞似上手の中ポンが大さうならばつたら、どんなにえらい役者にならばはるやろ」など、京童をキヤ

ア／＼言はせた扇雀も中だるみといふのか、變に逆境時代に立つた時があつた、「十で神童、十五で才子、廿才すぐれば……」の古い譬がわるく當てはまりさうな時代がたしかにあつたが、鷹治郎の死以來、扇雀自身にも大きな變化が來たやうだ、鷹に死別してからの扇雀の力闘ぶりは思ひなしか懸命のやうだ、「寺小屋」の源藏でも「紙治」の治兵衛でも、またこんどやる「土屋主税」でもことごとく鷹の當り狂言である、その亡父の當り藝を演じて「親そつくり」の評を得意然と聞いてゐてはいけけない、それは畢竟鷹のわるいところも眞似する結果になるからだ、もつと扇雀自身の型と工夫を見せるべきだ、いつまでもイミテーションに甘んじてゐる見物ばかりでない、東の若手を束にして向ふへ廻し「親以上」の折紙をつけられるべきではないか。

「羽左衛門さんツツクリやわ」など、橋家ビイキの女連に騒がれてゐる勳彌は全くいゝ二枚目である、他人の空位とはいひ乍らよく羽左衛門に似てゐる、しうか時代からそれは話題に上つてゐるが「辨天小僧」など實際「橋家縮刷」の観がある、こんどの「玄治店」などでは又ぞろその感が一層深からう、だがこれも羽左に似てゐるからといつて、無暗に「辨天小僧」や、「落人」「お祭佐七」などばかりやつてゐてはいけない、そうかといつて「生きてゐる小平次」などのやうに解釋上どうかと思ふやう方の芝居も困る、我當と組んでの世話物もよいが、とにかく「真似が賣物」の看板を外して器用だつた先代の名を耻かしめぬやういゝものを見せてほしい。

大阪方の立女形成太郎の將來に大きな期待をかけてゐる、この人も少々クサつ

てゐた時代もあつたらしいが、近頃のやうに勉強のチャンスに恵まれては一意専心研究と努力に精魂を傾けてゐるやう、この人などまだ今後伸びる人だ、「野崎村」のお光、「紙治」のおさんなどで相當いゝ味を見せた、この人に魁車以上の大成をのぞんでゐるのは自分ばかりではないと思ふ。(十一、一、廿三)

新劇壇二月號!

關西唯一の脚本雜誌

各書店、各座賣店に

て目下發賣中!

定價四十錢!

ケンネツト号



萬人愛好の 撰買車
 鋼産品中の完璧 是非御愛索を

市内特約店ニアリ

株式会社 大澤商會
 京都市三條通小橋西

お富と與三郎

● 高 谷 伸 ●

お説えの黒板塀に見越の松といふ妾宅の雨あがり、粹な男だが面に看板の傷のある與三郎と、蝙蝠の刺青のある安との強講場、今では玄治店的一幕が獨立して上演されるが、三世瀬川如皇が嘉永三年三月中村座の二番狂言として書卸した時はこの前後に見染もあり濡れ場から血腥い傷害沙汰もあり捕り物もある首尾一貫したもので乾坤坊良齋の講釋を基礎としたものである。

當時美男の評判の高かつた八代目團十郎の與三郎を中心に、人氣役者を取巻く御殿女中や花柳界の人々の前に、美しい男の切りさいなまれる場面を展開してサデイズム的な効果を狙つたのが三十四ヶ所の刀傷なのである。

與三郎は江戸商家の若旦那として生れ家庭の騒動から腹違ひの弟に家を譲るために放蕩をはじめたしほらしい男であつ

たが、お富といふ女を知り博徒の刀双の下をくゞつてから性格が一變し市井無頼の徒となつたのである。當時の見物は江戸末期の額廬期に於けるスリルを求め、心から、この玄治店の出會ひよりも寧ろ赤間源左衛門が美女美男を切檻する場を喜んだものである、書卸しの八代目に對して源左衛門を勤めた關三十郎は看衆憎惡の的となり、終には舞臺で聞くに耐えない罵言を蒙り土間から飛び出す客があり、三十郎は耐えきれなくなつたためその客を毆つたところが、毆つた物が双引とはいへ本身の刀であつたため騒ぎはさらに大きくなつたといふ話さへある。

普通は、まづ木更津の見染めにはじまり、美しい所を見せる與三郎が赤間一家の者とすれちがふと乾兒の一人がドスをちらつかせるので與三郎は慄へるといふやうなしぐさに人柄を見せ、後の對照に

したとも傳へられる。

それから相生の手引きで源左衛門の妾宅、つまりお富の宅へ忍んで海松杭の松にみつかり、源左衛門に斬られる。エロもグロも十分な場面をしてこの玄治店となるのである。

玄治店はまた源氏店とも言ひ、此頃では多左衛門が臍の尾書きからお富與三郎の兄弟であることを知らず結末になつてゐるが、以前は、再び與三郎が忍んできて藤八を縛り上げその前でお富と酒宴をした擧句藤八をつぶらにぶちこんで質屋へ強請に行くところもあり、さらに、捕へられて島流しから島脱けをして、不在中觀音久次の世話になつたお富の家へ押しかけるなど、講釋物の長篇らしい波瀾重疊の筋立に、歌舞伎特有の香爐の紛失事件まで絡んでゐるといふ念の入つたものである。

お富といふ女も與三郎の外に、源左衛門、多左衛門、觀音久次と男から男へと亘つて行く貞操観念など頗る怪しい江戸から流れてきた藝者であつた。

騙騙安といふのはイヤがらせの小悪黨に過ぎなかつたが、後に三代目仲藏とな

一年間娛しめます

三圓三十錢で

道頓堀年極め

御購讀を……

つた中村鶴藏が當て、以來、故人松助の當り役として重んぜられるやうになつた。今では赤間屋源左衛門が殆んど出ないのでそれ以上の大役である。

與三郎は八代目團十郎から五代目菊五郎にそして現羽左衛門に傳はつたものを

今度は勘彌がやるといふ。

現羽左衛門と五代目の演出上の差で一番主なところは、羽左衛門がする兩手を組んで膝を抱えての見得を、五代目は左手でボンと膝を叩くぐさで見せたのだと傳えられてゐる。

お富は近年では故梅幸の專賣のやうになつてゐるが、梅幸も松助も故人となり羽左衛門の相手方も變つた。

そして、今度の歌舞伎座ではすつかり次の時代の人々でこの玄治店を見ることがなつた。

青年歌舞伎の人々に就ては既に道頓堀十一月號に「歌舞伎相續時代」の題下に書いたし寺子屋や封印切に就ても會て道頓堀誌上に書き、堀川に就てはかなり詳しい考證を上方趣味に書いた事があるので、今度は玄治店を話題にすることにした。

我當・勘彌・扇雀に望む

森のほ

我當君——

先年東京で評判の青年歌舞伎を観て歸つた家内が、中でも我當君の盛綱が素晴らしい出来栄だつたと話したものである。私はあの千代之助がいつの間にも、そんな立派な役者になつたのかと不思議な位に思つた。そして幸ひ去年の十一月南座で其人達の芝居を私は見ることが出来た。我當君は松王と太九郎と日本駄右衛門だつた。私は三つの役の中で太九郎に感心した。よし六代目といふ立派なお手本から透き寫しにしたとしても、新しい世話物をあれまでにこなせるのは豪い、この優にかういふ領域があるのかと頼もしく、嬉しく思つた次第である。

松王は仕事より熱の方で見物に迫るものがあつた。さんざ見古してゐる「寺子屋」で私のやうな者にも涙を催させたのは、若き松王、若き千代への同情だけで

なく、確に演者の熱がさうさせたのであるのを見のがすことは出来ない。然し芝居は熱ばかりでも行けない。尤も近頃の人達は熱だけで満足してゐるらしいし、役者にも熱だけを賣物にしてゐる手合もある。無論、熱が根底とならなければならぬが、熱だけで藝術が表現されるものではない。まして外面的な熱の如きは寧ろ非藝術と呼ぶべきものだ——と小生は思つてゐる。

賢明な、そして研究心の相當強さうな我當君は、そんなことは無論承知してゐるのだらうが、筆の序に申しておく。

それから、これは「演藝畫報」にも書いたが、松王にしても駄右衛門にしても貫祿を示さうとしてセリフの間合が伸びる。これは今後は非、注意もし、研究もして貰ひ度いのである。

我當君は南座の總稽古の時、扇雀丈が

する事、爲す事亡父に生き寫しであるの
を見るにつけても、自分には父祖の遺し
た型通りに演れないのが心淋しい、謂は
ば自分は不孝者だと述懐を洩らしてゐた
が、と同時に自分の缺點を能く辨へ、そ
してその缺點を補ふことに工夫を凝らし
てゐることも、その時の言葉のはしはし
に依つて知ることが出来たのは愉快であ
つた。

「先づ足もとを見よ」で、自分の短所を
知り、長所を役立て、行くのが、先づ出
発の第一歩である。徒に遠い處にのみ
憧れてゐてもいけないし、元來た道はか
り振り返つてゐてもいけない。新道を行
くにしても、舊道を辿るにしても先づ足
もとの御用心である。

勘彌君——
前の勘彌君も今の勘彌君も、さう親し
い附合は無いが、實に總てが能く似てゐ

るやうに思ふ。舞臺でどの役々でも演り
こなして行く器用さも亦同じで、恐らく
何を演らせても演り得ないものはないだ
らう。役者として藝の範圍の廣いのは本
當に心強い。が、廣いと同時に深く研究
して行くことが忘れられてはいけない。
間に合ふだけの價值だけでは、ほんの器
用さといふに留まる。それでは折角天與
の技能を有効に使用したとは言へまい。
百鳥の聲を能く真似るものは、おのれの
聲を識らずといふ聲が昔の人の詞にもあ
る。勘彌君が本當に生きるのには、自分を
本當に知ることである。自分を本當に識
つた時、其處に本當の自分の藝術が生ま
れるのだと思ふ。

扇雀君——
扇雀君が亡父鴈治郎の研究し盡した型
を後世まで遺して行きたいといふ美しい
志には感服する。然し同君の舞臺を見

ると、餘りに型を踏襲し過ぎる。可い、
悪いの區別も無い程、徹底的であり過ぎ
る。それは今後じっくり考慮をめぐらさ
ねばならぬことだと私は思ふ。最も悪い
ことは、他の役者がシバキをしてゐる場
合に、それに一向お構ひなしに自分のシ

寒中御見舞申上候

「道頓堀」

編輯部一同

バキをして見せることである。これは鴈
治郎のみでなく、上方役者の悪い癖であ
り、習慣でもあるのだが、これは甚だ面
白からぬ遺風で、是非改めて貰はねばな
らないことである。

作者から見た

井上正夫の女役

龜屋原

徳

・カッツト寫眞は井上正夫の「お民」。



(一)

朝日新聞の「映畫と演藝」
わたしの「海鳴り」を掲載した
時、記者の林次忠君が、一體
この脚本の老婆お民は誰かや
るのだらう？ と思つて松竹
の本社へ電話をかけたところ
「それは井上正夫がやる」と
の返答に「へえ？」と驚いた
といふ話をした。全く「毒草」
以來二十年、井上さんの女役
など誰も考へてゐるなかつた

らうと思はれるだけに、今度
の「お民」は少々人々を驚か
せたらしい。

(二)

ある新聞評では、何かしら
そこに、興行宣傳の意味か
ら世間をびつくりさせて氣を
ひかうといふ意味から發足し
た井上さんの女役の意味合が
あるやうに書いてゐるが、こ
れは大變な誤りで、そも／＼
あの脚本を私が書いたのは一

昨年さくねんの十一月じゅういちがつ、それ以來それいらい、井上いの上さんも八重やへちゃんも、役やくの精神せいじんその他その他について約やく一年餘いねんあまりの研究けんきゅう時日じじつを費つひしてゐるのである。嘗あつへて、井上いの上、八重やへ子こ共演きょうえんの私の脚本わしのきゃくほんでこれほど眞摯しんしな研究けんきゅうと熱意ねついとを以もつて上演げんげんされたものはなかつた位である、演出えんしゅつに村山知義むらやまちぎさんを煩わづらはし、ピンからキリまで些いささかのアテコミなどもない段取だんせりで運はこばれて来たのである。

(三)

さて、井上いの上さんのお民おたみであるが、作者さくしやとして、何をどう云いはうにも、あゝ完全かんぜんにこつちの描えかうとした老婆らふばになりきられては文句ぶんくの云いひやうがないのである。

老婆らふばになりきるといふ意味いみ

は、たとへば西郷隆盛さいきやうたかむりの芝居しばいをやる場合ばあひ、俳優やくいが西郷さいきやうの姿すがた恰好かっこうにいかにもよく似にせたといふやうな表面的へいめんてきな形かたち、貌かほの問題もんたいでなく、あの作さくに描えかれた一人ひとりの老婆らふば——これは日本にほん中のどこを探さがしても現實げんじつに見み當あたる老婆らふばではなくて、あの作さくの中なかではじめて見み當あたるところの老婆らふばであると共に、日本にほん中のどこにもゐる老婆らふばの集約しやくやく的な性格せいかくであり運命うんめいであるのであるが——が、脚本きゃくほんの上うへで示ししてゐる一切いっけつを、殘のこる限かぎなく井上いの上さんがその肉體にくたいと氣魄きぱくと藝能げいねいとを以もつて表示ひょうじしきつてゐるといふ事ことである。

勿論もちろん、それがさうあり得えたといふことのためには、嘉兵衛かべ衛ゑに扮はんする藤村ふじむらさん、お島おしま

扮はんする八重やへちゃん、或あるひは山田やまださんのマドロス、村田むらたさんの多左衛門たざゑもんなどの、お民おたみへの關かん與い交錯かうかくが誤あやまりなく演技えんぎしきれたといふことも重大じゅうだいであり、また、たま〜、井上いの上さんは伊豫いよの生なまれ、私は藝州ゑしゅう生なまれ、その郷土性きやうどせいの相似さうじしが、『お民おたみ』を描えき上げて行く上の理解りかいを容易よういならしめたといふ僥倖げうじやうもあるが、何なにれにしても作者さくしやとしては、井上いの上さんの女役めいやくお民おたみについては満足まんぞくしきつてゐるといふ事を正直せうじきに告白こくはくする以外いげにどうする事も出来できない。

餘談よだんに亙わたるかも知れないが私は、身みを以もつて行動こうどうし生活せいかつする人間じんげんに一等興味いっとうきやうみと親愛しんあいを感じるもので、頭あたまの思惟しゆいする人ひと生觀せいくわんや哲學ていがくと、體からだで行動こうどうする

生活せいかつとはなれ〜の、首くびと胴どうとがちぎれてゐるやうな人間じんげんをめちやくちやに嫌きらふので、お民おたみがどんなに無智むちで、どんなに迷信めいしん的で、どんなにエゴイスチックであらうとも、それが彼女の思惟しゆいと行動こうどうの餘あまるところなき統一とういつの表現げんげんである限り、全く私わたしにとつてはたまらなく好きな婆ばなのである。こんな婆ばを、も一度いど是非ぜいひ書きたい。そして、今度こんどの井上いの上さんのお民おたみを、すくなくとも、井上いの上さんの藝能げいねいの領域りやういきの多少たうしょうの擴大くわくだんと見做みせして〜と思おもふ私は更に機はしを得えたらば、もう一度いど、いや、二度にど、三度さんど『婆ばさん』をやつて貰もらひたいと願ねがつてゐる。

(四)

ウキスデキ
 キラモツ
 ベルミソ
 キュラソ
 ベーミン
 ジェバ
 滋養葡萄酒

洋酒界の革命兒國産洋酒の逸品

國産金鶴印



元 發 賣 店
 横山商店

株式會社

大阪市東豊後町三番地

電話東(94) 一六六一
 二〇一三
 四六四九

お民が、息子の死を自覺した後に、腸を虚に泣くあの泣き聲は、人と世に交はると長く深く、人生の哀歎を身を以て——然り、書物や物語を通じてでなく——身を以て味はつた人々にとつては、人間宿命の哀泣を、無邊際の方から聴く思がするに違ひない。私は井上さんのあの泣聲

を聴いて、わが作、井上さんの芝居、そんなすべてを忘れて、明治座の監事室で、八才にして別れた母の哀泣を大地に隣る無邊の際から聴き得たのであつた。意地悪い表情で「へん、自作の自慢をしてけつかる」などとエゲツナイことをいふ勿れ。かゝる人間的感懐は、自

慢のハチノアタマのとそんな筋合とドギイ意味合が違ふのである。尚「海鳴り」といふ題名について、若干の人々は、それをリアリスチックに考へて、舞臺でもつとも海鳴りらしいものゝ音も感じもしなかつたなどといふ話もあつたが、私は、老婆お民の胸——それを

ば廣く深き大海に思ひ做し、お民の胸に鳴るあの物音、それをば象徴して「海鳴り」といつたのである。私は私としての井上さんの女役についての感を述べた。今度は、観客諸氏からいろいろなることを聞かして貰ふ番である。遠慮なく聞かしてほしいものである。

歸阪に際して

中村扇雀

私が東京青年歌舞伎と合同してから四月目になりました。吾れ〳〵の世界では四月つゞくといふ事は決てみじかいものではありません。京都南座から引つゞき十二月の明治座出演（東京）そして初春の第一劇場の未曾有の満員とにかく今や好成績です、其内京の初顔合せが當り祝ひ、そして春の第一劇場も當り祝ひ、十二月もおしつまつても賣切つた等當り祝ひこそ出なかつたが月からいつても第一の成功といはねばなりません。しかしこういつても私は第一に此成功を一番心配して居るものです。私は以前からよく一人で一座をもつた経験も有ますが見物の一ぱい來て居る間が一番おそろしいのです。其次に來るものをおそれます（不入でもこまりますが）只會社

繁華街に近く……交通至便・閑雅な和洋室！

モダン階上浴室新設

南地ホテル

南海難波新地戎橋停前

電話 南 四一四・四四一番

— 宿 —

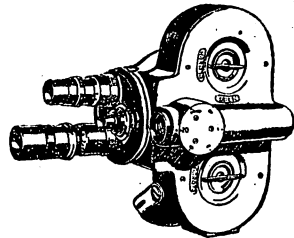
一 半 二 圓 三 圓

慰 半 額

へ御めいわくのかゝらない程度の見物のどふかして満員になるようきつとして見せるとか世間で自分のやつて居る事を一番評判してくれるようになるとか、そう思つて毎日楽しみたいたいのです。そうすれば其後はかたまつた客も出来石聲も上る事になります。何よりも私はお客の満員をはなにかけてたりお客のうすいのを氣にしたりするのはいけないと思ひます、そんな事を思ふ必要はないと思ひます、それはまだく私たちには早い事です。

しかし青年劇の人たちにそんな事は百も承知の人ばかりだし現にちやうしにのつてる人は一人だつてないから御安心願ひたい。只おたがひに氣をつけなくてはいけないと思つていつて居るばかりです。だから無責任におべんちやらにはめられたりする事はドウカと思つて居る。つい新聞に一寸でもほめられたりするといゝ氣になりやすいものだ。しかし氣をつけてさへ居れば喜ぶのも當り前だし、かまわないと思ひます。これからは増々吾れくの時代ですから一生懸命です又皆さんも其つもりで親切な注意をのぞんで居ます。(十一年一月廿四日第一の楽屋で)

フィルム



十六ミリ界の 最高峰

未だ曾てフィルムカメラで影して失敗があつたか？
未だ曾てフィルムカメラで一呎のフィルムが浪費されたか？フィルムは映画になると同時に最も優秀なるカメラマンを兼ねたボタンを押し給へ貴下のなされる事は唯それだけだ

(早進グロタカリあに店ラメカ流一國全)
BELL & HOWELL CO. U. S. A

五ヶ月振りに

辻野良一

旅から旅の五ヶ月でした。

馴染薄い土地を轉々と歩いて、悪戦苦闘の五ヶ月でした。しかし私は自信をもつて戦ひ續けた結果、幸ひにも何處の地でも思つた以上の効果を上げて参りました。そして今日、梅花匂ふ如月の道頓堀へ歸れるとはなんと云ふ倅せでせう。

然も浪花座出演です。——浪花座と云へば、私にとつて忘れ難い劇場です。更生新聲劇、新選座、そして現在の辻野良一劇の旗上げ……と、私の總てはこの劇場から出發してゐると云つても取えて過言ではないでせう。それだけに思ひ出は深いものです。前の二つの劇團は不幸にも一年足らずでいづれも解消してしまいましたが、今度の辻野良一劇は一週年記念興行をすることになりました。

思ひ起せば昨年、急速に出来上つたこの劇團は遅々たる歩み乍ら、やうく這ひ歩きが出来るやうになりました。これから更に歩く努力。自分は撓む間なく力一杯の奮闘する覚悟です。

就きましては脚本も嚴選に嚴選を重ねた末、子母澤寛氏原作小堀雄氏脚色「新選組時次郎」二幕九場、郡司次郎正氏原作、村田和緒、坂本晁一兩君構成「新納鶴千代」三部十二景の二篇を選びました。勿論、熱演以上の熱演をもつて大阪の皆様にお目見得する覚悟です。

かうして脚本陣容を背に私は勇躍して歸阪します。そして思ひ出深い浪花座で、意義深い一週年記念興行をより効果的にするべく、大雪の東京で、毎夜二時過まで激烈な稽古をしてゐます。どうか、借舊の御後援指導の程を——本紙をお借りして大阪の皆様にお願ひ致します。(一、二六)

辻野良一丈を語る

小堀雄

國定忠治親分を鍊えた赤城嵐を浴びて、水凍る十二月を、昭和座に鍊えられ——
越えて十一年一月、故人澤田正二郎氏の根城たりし公園劇場に、颯爽、奮迅、——
帝都公演二ヶ月の試練を美事制して、今や帝都に牢固たる地盤を築くに至つた辻野良
一丈！

霜凍る朝の、水雨をば降る夜の、君の努力は、君の宿痾を一掃し、茲に、肉體的に
も、精神的にも、正に甦生した辻野丈が、育ての地道頓堀へ——錦を着て一年振りに
歸ります。

東京のファンは、手を振つて別れを惜しみ、大阪の辻野ファン諸君は歡迎の花束も
てお迎え下さる事と信じて、僕は心強く思つてゐます。何卒ぞ、大阪の皆様、甦生新
生面を開拓してやがての制覇第一階梯を築き上げた辻野さんを、刮目して、見てやつ
て下さいまし。

藝道一段の進境を、僕が太太鼓を押して折紙をつけますから——謂はゞ、大店の老
舗の、新國劇から突然に、少し勝手の違ふ辻野一座へ迎えられた僕——實のところ、
辻野さんとは、その舞臺は片見してゐても從來一面識もなかつたのでしたし、全然白
紙で飛び込んで来た故もあり——未だ日まだ浅い爲、お互にしつくりゆかないところ
も有るかも知れませんが、何れ辻野さんが、僕の脚本の意氣を判然と呑み込んでくれ
僕が辻野氏の藝を深く認識すれば、遠からず良好な結合を得られるに相違ないし——
今度の大阪公演には出し物も精選、辻野一座としての劃期的陣立と思ひますし、——
層倍奮の御高庇御警援の程を、



芝居見たま、●●●小野千鶴

長谷川伸氏作

「たつた一人の女」(三幕)

歌舞伎座上演

柿の實が色づく——

棟建の低い板葺屋根が藪と竝んである。此處武州扇屋の宿(今の埼玉縣豊岡町)外れで、先刻より一騒ぎ起りかけてゐた。

騒ぎの主人公は、武州坂戸の宿の茶屋旅籠二本木屋半兵衛の娘おえんと、手に手を取つて逃れて来た旅人、六ツ又の和四郎兩人だつた。半兵衛の意を受けて、二人を追つて来た岡の三藏と、乾分の石坂の目吉、鏡の清太、赤筋の龜一が、ヤツと今、二人を發見したといふ譯である。

乾兒を初め三藏は、理を盡して和四郎の手から、おえんを取戻さ

うとした。が、和四郎は

「お前達のいふのは理屈だ。俺のは理屈や筋ぢやねえ。俺のは情だ。なまけといふものだ」といつて肯かなかつた。

おえんには、片柳の與五郎といふ親の定めた男があつた。三藏は親の氣持も一應は説いても聞かした娘は親のものだともいつた。が、和四郎は、それは子供の時だけで大人になりや、男のものだといふ齡の違ひで、話が解られえんだといふ和四郎の言葉通り、結果は長脇差を抜くことになつて了つたおえんは無理に三藏の乾分が、連れて行つた。

和四郎は逃げる三藏を殺してさひ、通行の旅の男と語らひつゝ、悠然と去つて行つた。

三藏の弟、入間の今吉が駈けて来た時には、既に遅かつた。

その夜——

二本木屋で、おえんは、両親から意をふくめられてゐる、ばあやと共に寝てゐたが、和四郎を思ふと安眠もならなかつた。

今吉が、兄三藏の殺されたことを、ばあやに知らせに來た。そして、今は、もう二本木屋の娘をそのかせた男でなくて、和四郎は立派に兄の敵であることを……與五郎が泥酔し、失戀の傷心を幾分か忘すれやうとするその氣持、娘を手から離さすまいとする両親——おえんは獨り苦しむしかつた。

「いくつになつても子供でゐられ

たら、お父ッさんやおッ母さんに
ご心配かけずにゐられたらうに、
なまじ大人になつたものだから
と、ばあやにしみん泣くのだつ
た。

和四郎が、再びおえんを連出さ
うと忍んで来た。待つてゐた今吉
が、さうはさせなかつた。

今吉「弟の今吉だ。お通夜の供へ
物を取りに来た」

和四「この首か」

今吉「丁目半目は白刃と白刃だ。

壺を振れ。俺も振る」

和四「この首は胴引きだ。お通夜
や葬ひの供へ物にはつかはせれ
え。こいつは、ぬしのある首だ」

暗闇の中で、二人が倒れた。

先刻より窓にしがみ付いて見て
ゐたおえんが驚いてゐた。

窓の破れる音に、人が騒ぎ出
す前——和四郎は刀を杖に、お
えんに支へられて、何處へか去つ
た。

後は傷付いた今吉が、悲痛な聲
で、追つてゐるのみだつた。

それから、八年経つた春淺い頃

——坂戸の宿の二代目、同の今吉
の家へ、ブラリ訪れた旅人があつ
た。額の古傷は、どうやら八年前
のあの夜に受けたものらしい。男
は、六ツ又の和四郎だつた。

「勝負に来た」といはれて見れば
病み上りの今吉も、どうでも長脇
差を取らずにゐられなかつた。乾

分や女房が、今吉の身を案じた。

然し、冗な死人や怪我を出したく
ないといふ和四郎の言葉——

空地へ出での一騎打となつた、

和四郎が、出てくる今吉の足元
をヂツと見てゐる。弱々しいそれ
だ。

「勝負は止した」と和四郎、「弱
身につけ込みたかアれえ」

が、今吉は頑として應じない。

それちや、日延だと和四郎がい
ふ。佐渡の小木の浜に、おえんと
良く似た女がゐるさうだ。俺ア、
その女に一目會つて来てえとい
ふ。

今吉は始めて、おえんの死を知

つた。

二年と五月前に、おえんは和四
郎の手の中で、息を引取つたので
ある。

然し、今吉には、貧乏の中の、
伴せが——和四郎のいふ、二心一
體の生活の幸福が解せられない。

腹が空つて、何の伴せだといふ今
吉である。

おえんが死んでから、三年の間
おえんに似た女を探して歩くのが

仕事、今の和四郎——今吉の現
在の幸福——たつた一人の女房

——との陸じい話を聞いて、首を

やらうといひ出した。が、今吉は
授け首なら欲しかアれえとキツバ
りいつた。五分の勝負で、立派に

貰ふから、丈夫になつたら来てく
れ。そして、

「顔も姿も似てゐた上に心柄まで

似てゐたら、四十九里の海の中に
こつちの方へ渡つてくるな」と情
けの一言。和四郎は思はず、落涙
するのだつた。

片柳與五郎が、今では、女房と

三人の子供迄連れて、通つて行
く。

和四郎は、與五郎に、おえんの
死をいはうとした。然し、與五郎
は、耳もかさず、おえんのことな
んか夢にも見ないといふのだつ
た。

和四郎はホツとした。そして、
「あの男は、矢ッ張りおえんにと
つて一人女に一人男ぢやなかつた

中座家庭劇 お名残り陣 十五日初日

~~~~~  
ンだ。おうツ、今吉さん、遅くと  
もこの秋には屹度来る。その時渡  
すぜ」

首を叩いて、飛ぶやうに去つて  
行つた。

絹の袖を織る機の音が、のんび  
り聞こえる中に、今吉夫婦が感慨  
深く見送るのだつた。

## 海鳴り

— 南座上演 —

幕二

これは、ある島に於ける、現代の出来事である。

半農半漁を渡世とする嘉兵衛とお民の仲に、與助といふ一人息子があつた。

與助は、ある船會社に船員として働いてゐたが、三年半以前、神力丸といふ船に乗込んで、船と共に行方不明になつて了つた。船會社は、船は沈み、乗組員は溺死したものととして、報らせて來た。然し、嘉兵衛夫婦は決して、それを信じはしなかつた。殊に、お民は島の人々から、今では、狂人と噂されるまでに、與助の歸つて來るのを信じて疑はなかつた。

與助には、島の娘で、お島といふ幼な友達で、思ひ思はれた戀仲の許嫁があつた。

お島は美しい。與助が死んだといふので、縁談が幾度もあつた。それを強く引止めて、應じさせなかつたのは、お民だつた。一年——二年——そして、與助が歸るまでと。

三年半の月日が経つた今日、お島の叔父、多左衛門が嘉兵衛を訪れて來ての語——

お島を他家へ縁づかせるといふ。

理を非に曲げることば出來ない——どう考へても、理は多左衛門に在つた。

お民は、そんなことゝは知らず金比羅様の神籤を持つて、嬉しうに歸つて來た。

「待人遅くとも來る」——嘉兵衛も何時の間にか、それを戴いて、禮拜するのだつた。

その夜——

お島が、風呂敷包を抱へて訪れて來た。彼女は、嘗て與助から貰つた着物や手紙を、叔父や父にいはれて、返しに來たのである。

お民が歸つて、お島の心を知ると、怒り罵つた。

大事の伴の嫁が、どうして他家へやれやう。與助は歸つてくる。屹度、歸つてくる——

嘉兵衛の言は、逆にお民を昂奮

させる許りだつた。

お島は譯もなく、裏切るやうにとられのが口惜しかつた。貧しい彼女の家庭は、もう一日もお島を置けないまでに逼迫して來てゐるのだつた。その上、世間から、彼女に浴せられる嘲罵。

「稼がす後家」——

同僚の抱く子供——お島は、愛に——家庭に——憧れてゐる。が、お民には解せられさうもない若い女の心理である。

遂に、お島は、與助を生かして此處へ出してくれとお民に迫つた。

お民には、も早や返す言葉がない。せめて——せめて、與助の與へた着物を、今一度着て見せてくれろといふ。

お島に羽織らせ、その姿を見てゐる中に、お民は再び、此の可愛い嫁を手離し難くなり、やらない何處もやらない、お島は俺が嫁だ……俺が嫁だ——と泣き叫び、お島と共に、くづ折れるのだつた。



・カット寫眞は都築丈と河原小市松君・

## 私の女房役と

## 劇團の變轉

(4)

都築文男

古今未曾有の大震災は遂に帝都を壊滅せしむ、興行などとは以ての外、その後、澤正がやつと日比谷でバラック建て芝居をしたと云ふ事からおして知るべしである。

商工業者は云ふに及ばず、恐らく藝人と名のつくものゝ大半は關西落ち爲に大阪では此等帝都俳優を收容するには重荷すぎる。

此處で僕は、ちと大袈裟かも知れないが、例へ一人でも多く東都俳優諸氏が大阪で出演する機會が出来得たならばと、

當時の帝キネへ四ヶ月契約で身賣をし、これが爲幾分でも東都俳優諸氏の道が拓ければと思つた。

同年十一月神戸相生座にて開演、故秋元菊彌、靜田健、女優では故村田榮子、等の新しい女房役を得た。餘談だが當時の一座に現在東京新派で重きをなしてゐる大矢市次郎氏が居た、最眞目かも知れないが大矢君は當時誰より舞臺は傑れてゐた。その一座で翌年一月福岡博多劇場公演の際、同市大博劇場へは伊井、河合一座が來演してゐた。某日偶々自分等

の舞臺を見に來た伊井睿峯氏が、大矢氏を見出し、一つは伊井氏門下の故藤井六輔の書生であつた藤川宗六である事を知り、大矢氏を東都新派へ連れ戻したのはその時からである。伊井氏の孫弟子に對する愛情もさる事乍ら、彼大矢氏が今日の確固たる位置を築いた所以でもある。

帝キネとの契約終了後、同年三月角座にて成美團が復活した。同年五月震災後初の東都を訪れバラック建築の神田劇場にて「月魄」「光の世界」等を演じた。其後名古屋、大阪、神戸、京都と打つて翌

十四年二月角座にて喜多村一派の加入を得て、數次成美園中の最高スタツフとなつた。狂言は「琵琶歌」「雲の別れ路」自分の女房役としては最上のものであり女房役に對して師事し得る最初の機會として、自分としてもこれ程力の籠つた事は嘗て無い。名古屋新守座を経て同年四月愈々京都座公演となつた。

扱、前回に述べた「呪はれの日」公演と云ひ、此度の河原市松氏に關する件と云ひ誠に京都座と自分とは因縁淺からぬものがある。

小織氏と高田亘氏が座長部屋、喜多村福井は各々一人部屋、自分と河原氏が三階の一番廣い部屋に鏡臺を並べてゐたが某日、英氏の後援者で大同生命保險の重役某氏に保險勸誘を依頼され座員に轉旋する事にした。國活當時自分は日清、帝國の兩保險に契約してゐたから、合部屋の河原君に例の三人の愛兒の爲にも一人

五千圓程度の保險加入の必要を懇々説いた。(保險會社からコミツションを貰つてゐるんぢやありませんよ……)河原氏も直ちに加入する事になり、保險會社附の醫師がやつて來て、河原氏の健康診斷をして歸つた。

而るに二日、三日、經つても音沙汰が無い。一週間目に保險屋から別の醫師が來て河原氏を再診斷する、結果が一萬五千圓の保險契約が成立しない、原因は河原氏の體の何處かに缺陷があるに違ひないのだが。數日後例の英氏の後援者がわざ／＼英氏の部屋を訪れ、「河原氏は腎臟が悪い、殊に萎縮腎臟だから、一度倒れるやうな事があつたら再び立てまい。」と注意した。英氏は早速知らせにやつて來たが、それを耳にした河原氏は見る見る顔面蒼白となり、死刑を宣告された囚人のやうに萎れてしまつた。自分も驚いたが、寧ろ氣の毒になつて、

「悲觀するなよ、河原君。この症狀を知らずに萬が一倒れるやうな事があつた場合、どんなに不幸か。早く知ればこそ反つて幸福ぢやないか——今月限、休演して身體の靜養をすれば——」と河原君を思ふのあまり勧める。結果某博士の診斷を乞ひ、その博士の勧める儘、河原君は妻子を伴ひ別府へ靜養する事になつた。

これが京都座の出來事である。

悪い事は續くもので、河原君を一時にせよ失つた矢先、翌五月公演の際、二十三日に三但地方に大地震があつて百五十圓の義捐金を朝日毎日兩新聞社に委託した、と思ふと翌六月の神戸松竹劇場にて恩師村田正雄氏の訃報に接した。永らく手鹽にかけて頂いた恩師を失つた事は、永らくの間暗い色しい曇りとなり胸の中に残つてゐた。と前後して名古屋在住の深澤恒造氏が病床にあるとの報に座員から見舞金を募つたり、加へて河原氏



の休演、いやもう當時の自分の精神状態はサンザンの打ちのめされた形。

半歳経過した翌年、聊か健康を取戻した河原君が、如何なる考へからか、漸く

復興の徴現れ出した東都の恩師伊井容峯氏の許へ走つた。東京の舞臺で持役に成功し、新聞などにも好評噴々たるもの

だったが興行成績面白からずして一ヶ月後直ちに關西に舞戻つてきた。其後再び東

都に向つたがこれが彼の最後だつた。東都に向つた彼が浅草松葉町旅舎の一室に

旅の疲れを按摩で補ひ、スヤ／＼と安眠に陥つた儘、再び立たぬ黄泉の客とな

つた。想へば彼は華美で劇的な數奇な運命の持主である。河原氏の訃報を耳にし

た自分の悲しみと落膽、あの保險會社の一重役の運命の暗示は正に適中したのである。

東都で懇ろなる葬儀が終つて、遺骨が大阪驛に到着した時、これを出迎へたのは自分と故人の藤山秋美と二人きり、こ

れがあの水都の隅々迄センセーションを捲起した河原市松の姿たらうとは、浮薄な人情に鬱憤を感じるよりも嘆息せざるを得ない。

だが白井社長は彼の生前の劇界に於ける功勞を誇ひ、大阪に於て社葬として盛大なる告別式が催された事を附記しておく。

河原市松の名を留める意味に於てもと彼の第二兒を河原小市松と命名して、小織、喜多村のコンビのよき子役として自分が特に幕間を割いて挨拶をした。自分も涙、観客も涙、舞臺、觀覽席相呼應して河原氏の靈を偲んだものだ。

この小市松君、二ノ替に「乞食の子」の役が振當つたが、子供心にも氣にしてゐた處へ學校の同輩から、小市松君自身で洩したのだが、「乞食の子ヤイ」と冷やかされるのが餘程辛いと見えて、舞臺稼業を退いて、今では某中學に通つてゐる。

結核にネオワリシ

花柳病科

藤原醫院

★ 番六三六二戎話電 ★ 入西側ノ溝筋橋戎 ★

結核にネオワリシ



作家  
訪問  
2

演出五十册紀念の

# 山上貞一先生を訪ふ記

上田口猿子



朝日新聞の「學藝だより」に大阪劇作會例會天王寺松ヶ鼻町山上氏宅にてとあるを見て、關西劇壇の霸王今を時

めく松竹家庭劇の舞臺監督山上貞一先生をその自宅に訪ねる。

「大森痴雪先生の次とは恐縮ですね。まだ松竹にだつてえらい先生方がどつさりいらつしやるのだから、私なんか一番どんぢりに入れて貰えれば光榮ですよ」  
「いや、編輯子の嚴命ですのよ」  
「その共同編輯には、確か私の名

がある筈で、世間にすみませんよ」と固辭されるのを、まあ〜と納めて、「それに演出五十册目の紀念といつた意

味で」

「それなれば甘受さして貰ひませう。早いもので松竹に囑託されて演出を仰せつかつてから、この一月興行で演出や舞臺監督とボスターに名を出したので、恰度五十册目となりますので、勝手乍ら自祝の意もあつて、何か意義あるものをと探してゐましたが、あの尾崎紅葉山人の「夏小袖」を見つけた譯で

「第一册は何でした」  
「それがとても大物で菊池寛作川村花菱

脚色の「明眸禍」六幕九場で、角座の新興成美團がスタートです」

「それは何年何月です」

「昭和五年の十二月興行で、私が三十一歳でしたから、今年は三十八歳になつ

たのですから、六年間に五十冊といふ譯で、座付としては珍らしい事ではないのですが、私としては一冊毎に決して遣り放しな仕事をしてないだけに記念したく思つたのです」

「家庭劇が多いでせうな」

「え、家庭劇が恰度半數の二十五冊です。歌舞伎劇では岡本綺堂先生の「權

三と助十」を演りましたし、宗教劇は角座で「金光大神」を演り魁車・壽三郎・長三郎で中野實君の「さまよへる

十字架」といつた異色あるものもしました」

「夏小袖は大層好評だつたそうですね」

「え、明治の當狂言の再上演といふ機運に乗じた譯で、澤山好評の投書があ

りました。近く黙阿彌の「人間萬事金世中」を私が改修して上演したく思つてゐます」

「最近「舞臺」にも「新劇壇」にも少しも劇作を發表なさいませんが、家庭劇でお忙しいでせうな」

「忙しいのは事實ですが、去年まではスランプだつたのです。今年からどしどし書くつもりです。まづ筆慣らしとい

つてはすみませんが、目下關西中央新聞の連載小説を引受けました。「愛憎二代」といふのです」

「あれはモデルがありそうですね」

「どうもその方が筆が樂に運びますが、實はその方は従で私の創作が主として興味を呼ぶのですよ」

「すると今年は大に書かれるのですな」

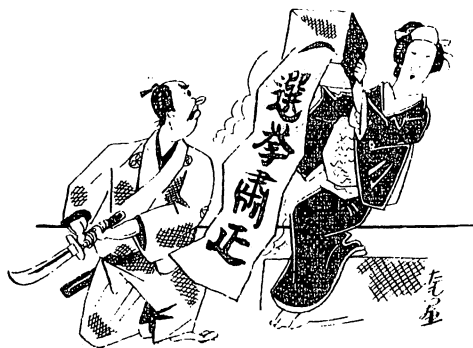
「書きます。そして自分の實力を改めて問ふてみたいのです。左團次や新國劇の脚本募集にも應じてみたいと思つてゐます。今の私の立場で私が自由に自

## 寺小屋異變二題

大槻たもつ

(1)

源藏の双を受ける文庫の蓋があいて「ヤヤヤ、ヤヤ」。菅秀才殿のお身替り候補、見事當選しましたかえ。」





作に脚光を浴びさせてゐては、或は自己満足に終る嫌ひがあります。そういふ意味でなるべく本職とは縁遠い——私も綺堂先生のお弟子です。いゝ挿物を書くつもりでゐますよ」

「然し家庭劇でも盛んに挿物を演り出しましたね」

「え、お蔭であれも大好評で、十吾さんも天外君も大乗氣で引續いて大いに演る意氣込です。眼先が變つて面白いですからな」

「劇作會の方はどうです」

「これは岡本綺堂先生監修の『舞臺』の大阪在住の誌友の發表批評會です。『新劇壇』にも劇作研究會がありますし、それに私にものを聴く會といつた五日會といふのが毎月開かれてゐます。十四五人の集會で、この人達がうまくなつてくれたら、關西劇壇の興隆はまづ脚本よりのスローガンから言つても大

いに喜ぶべき日が来るのですが、私はこの後進指導の仕事だけでも、私の大きい事業だと思つて熱心に世話をやいてゐます」

その中にも「今晚は」「今晚は」と劇作會の會員が集つて來られた。壁間には「東洋の娘」の舞臺面や「さまよへる十字架」の油繪、「戀の繪日傘」の稽古場の寫眞、石河と伊志井の舞臺寫眞は「月魄」の一場面だと聞くなどが、すらりと大小の額に掛けられてある中に、「梨園」爲山上君、鴈治郎とある色紙が朱椽の丸額に納まつてあるのが眼を引く。

「さあ、始めませう。みなさん、何か書いて來ましたか」と山上先生は集つた人々に微笑んで問はれた。會が始まるのだ。私もその一員に加えて頂いて劇作三昧の意義深い夜を知らずに更かした。

「ヤ、こはこれミッキー。」「なんとマウス、菅秀才の首に相違ない。」何んこー。「いやさチュー、忠と泣きおるワ。」

(2)



# 歌舞伎座と角座

一月の芝居

西尾福三郎



・錢十五圓五外號・

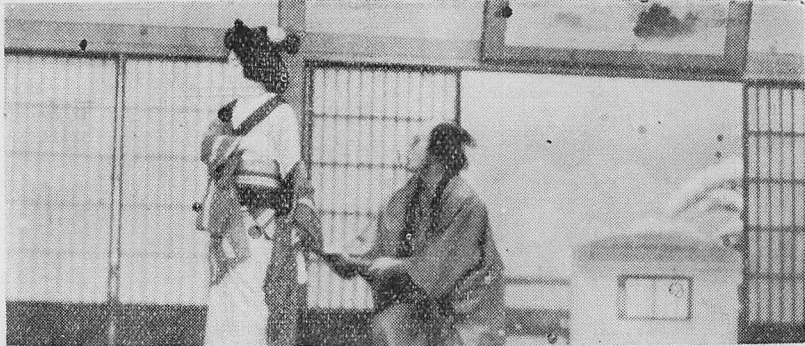
お正月の芝居は道がに何處も彼處も大入満員續きだつたのはお目出度い。

その中で新國劇が大劇場歌舞伎座へ初出演するについて、いかなる狂言を以つて見えるか、尠からず興味を持つて期待してゐた。所があの大舞臺を縦横に驅使して自在な演出を見せ得られる筈のこの劇團の優秀な演出班があるにも拘らず、結果は案外平凡だつたと云はざるを得ない。僅かに海援隊の大詰櫻島丸甲板の場で歌

舞伎座らしい大舞臺の味を見せてゐたに止る。俳優が小さく見え過ぎると云ふ事實は、強ちにその容れ物たる舞臺が大き過ぎると云ふ缺陷から許り來る物とは限らない。一面では大舞臺には大舞臺としての藝が無ければならない譯で、この點の心構えが現在の新國劇ではまだ一寸不十分なのではないだらうか。舞臺の隅々まで行き渡る藝の幅、それは今後の新國劇の年齢に俟つより外に致し方がない。

折悪しく酷寒襲來で俳優陣に異狀ありて代役頻々、主なる本役は海援隊で番付通りの顔が揃つたのみで、二番目は辰巳が休み、三番目は二人共休みと云つた期待外れの結果で、自然細かい劇評はできない事になつてくる。

所て海援隊は新國劇の演劇目標たる半歩前進主義を見現したやうな作品で辰巳



・ 森 の 石 松 の 戀 ・

島田小川のガツチリとした三部合奏がよい効果を見せてゐた。作者が腰を据えて書いたらしい強靱な所、視角の鮮明さ、そして演出のツボも總體に好感を持つて見られる作品であつた。

之に反して號外五圓五十錢は或意味で凡そ新國劇らしからぬ演し物であつたが島田一人の好技で前者以上に強い印象を残したのはむしろ意外だつた。シンミリとした人情物の藝の味は新國劇等で賣り物にすべきではないだらう。思ひなしかかうした世話物のうまい菊五郎の味が島田の藝の中にもよい、閃めく。荒又の櫻井、霧笛のクーパー、そしてこの號外屋と近來の島田は老役の中に一つの活路を開拓してきた事は賢明な行き方であるこの際島田の精進を希望すると同時に、對手役たる辰巳の一層奮起を促したい。「森の石松の戀」は正月物らしい朗らか

な所まで行つてはゐないが、肩の凝らな所が取り柄か。然し作者も云つてゐられるやうに何處やら速成の感があつて、石松の戀に涙を感じる所か私はナンセンスに近い氣がした。

角座は第一回の狂言を見落して二の替りを見た。

感情山脈の劇化は芝居としては前の花咲く樹の方が面白かつた。前者では瀧の河内エマが全幅的に生きてゐたが、今度のはるみは何處やら窮窟さうで期待した程生々してゐなかつた。これは一つには脚色のせいもあつて、都築の六藏を主にせなければならぬ必要さうなつたのは止むを得まい。デパートの場で女店員を澤山登場させて流行の隠語を使用させる所、これが本筋に關係がある筈だの



・ 隊 援 海 ・

にその説明がなく、單なる脚色者の例の  
ミソに終つてしまつてゐる。役々では都  
築の澁川六藏が一番藝もあり腹もできて  
ゐてよかつた。瀧のはるみは演所を封じ  
られた形、山村の三郎は生硬の厭ひがあ  
つた。

美しく白痴の死はこの一座がこの作品  
を取上げた勇氣を推稱したい。惜しいの  
は時候外れのために晩夏の倦怠したやう  
な感で見ると酷寒に慄え乍ら見るの  
とでは受入れる感情に大變な氣分の相違  
がある事である。殊に官能的なこの作品  
の味がシユン外れでは大部減殺されざる  
を得ないだらう。然しさうしたハンデキ  
ヤツプを別にして、ともかくも見答えの  
ある芝居だつた。梅野井のあの聲あの柄  
がこの劇の女主人公にびつたりと合致し  
て、瀧の勝氣で我まゝな妹爲子との對比

もよく、井筒に腰をかけたまゝ、不知不  
識惹き入れられるやうに井戸の中へ陥る  
所等、同じ作者の谷底にみるあの怖ろし  
い一刹那のヒヤリとさせるスリルがま  
ざ／＼と感じられた。他の役々もそれぞ  
れ難の無い出来であつた。

鬼神のお松は興味本位な大衆劇で梅野  
井が一人で活躍してゐるが柄が小さいの  
で物足りない。

要するにこの一座の面白味は、白痴の  
死と云つた作品と鬼神のお松のやうな作  
品が同じ舞臺で演ぜられて何れも好評を  
受けてゐる所にあるのであらう。謂はゞ  
雑色の美だ。

梅野井と瀧、中田と都築、合ふやうな合  
はぬやうなそれ／＼の人を統制し補作す  
る強力な或るものが今後必要なのはな  
いだらうか。

# その時折りの記

◆◆◆ 大橋孝一郎

二月の大坂歌舞伎座は大當り続きの東西合同若手の初の來演です。十一月は京都と神戸で、十二月、一月は東京で大好評を博しました。殊に一月は東京各座中での第一位の大入だったと云ふのだからたいしたものですよ。何となく若い人々の時代の迫つて來たことを痛感さすではありませんか。しかし私は此處でその狂言に就いていさゝかの苦言が呈したい。と申しますのは餘りに先代の型なり、名跡なりを踏襲することにのみ専心してはいないかと云ふことです。尤もこれもこれは興行方針によるものではありませんが、今假りに此の興行の新聞廣告を拜見しますと、その役の一ツ一ツが悉く先代なり先輩なりに如何に髣髴としてゐるか云ふ模倣の巧さのみに興味の一點が盛られ話題となつて居るやうですが、これもしも若い俳優達の本眞の心根だとしまするなれば將來の

歌舞伎に對してその底に一抹の淋しさを覺えずには居られないのであります。明治の歌舞伎が決して今日の歌舞伎ではないやうに、今日の歌舞伎また明日の歌舞伎たり得ないのであります。若い人々は、もつと時代の流れを知らなければならぬでせう。でなければ段々時代からとり殘されて、醜い殘骸をさらすに至ると思ふのであります。このことは決して三百年來培はれた歌舞伎の精神を蔑ろにしたたり、傳統の型を否定する意味ではありません。例へば松王一役に就いて申すなれば、型を型のみに終らすな、その松王には立派にその時代に活きる演者の人間味が伺はれなければならないと云ふのです。正宗白鳥氏は六代目の仁木を評して「私の今迄見た仁木の中で最も面白かつた理由は菊五郎の太々しい人間味が生々しくその役の上に現れてゐるから」と云つた意味のことを何かの雑誌に書いて居られたのですが、かくなれば歌舞伎は決



して古典ではなくして、立派な近代劇だと思ふのであります。今月の狂言は何れも先代なり先輩なりの當り狂言揃ひであります。若手の諸君は是非其の點を心掛けて、自分の持味をも活かして新しい歌舞伎の境地を見せて頂きたいのだと思ふのであります。斯くしてこそ歌舞伎の將來性は保證出來得るし、手と云ふ文字の意義も大いにあると思ふのであります。

○  
またこれ等の若い人々に新しい一ツの脚本をも與へなかつたことにも不服があります。矢張り一律の狂言でしかないのは若い人々なるが故に惜まれてなりません。若い人々には或る程度の冒險心と野心とがなければならぬ、手をかけない前から成功不成功を考へるのは餘り意氣がなさ過ぎはしないのでせうか。東京では新しいものを演つてゐることでもあるので、是非一ツ位は取りまじへて貰ひたかつた。つた一人の女」だけでは物足りない。もつと野心的なものを私達は要求してゐるのであります。此の點同じく、此の月南座で井上が『海鳴り』を上演してゐることは譽めらるべきであります。尤も此の狂言を「井上正夫最初の女優」と云ふ

點を賣り物にしなければならぬことは、未だ未だかなしむべき御時勢ではありますけれども……。

○  
或る雑誌の座談會が市川左團次が大阪では芝居がやれないと云つてゐます。成程そう云へば震災後來阪しない様です。然し左團次が來阪して以來、上方も大變な變り様です。段々東京化して行くことは事實です。これは交通がスピードアップさるゝ程、この現象は濃くなります。ですから左團次が一時的の印象を何時までも根に持つて、その感情で現在の大阪の觀衆を批判してゐることは大變了見狭いことだと思ふのであります。私はあの左團次の言葉を讀まれた大阪の好劇家の方々へ、決していゝ氣持はしなかつたらうと思ひます。是非共左團次丈のこの偏見を訂正して頂き度く思ふのであります。

○  
この間「名畫スーヴニール」と云ふのが催されました。隨分古い映畫が上映された機會がありました。この時學生映畫

聯盟の方などにバレンティノを知らない方は猶更のこと、「ヴァリエテ」や「サンライズ」等の比較的新しい映画ですら見てゐない方の多いのに驚かされたことでした。しかしこれは決して故なきことではないのであつて試みに學生諸君に生れ年を尋ねてみると大抵大正五年乃至七、八年と云ふ方が全ででしたが、成程これでは御存知ないのは尤もなことです。そこで僕は貴方がたは矢張り若い。私はピナメリケリもプロテアも新馬鹿大將も覚えてゐると云ふと學生の方は、貴方はもうそんなお歳なのですかと如何にも老人扱ひにいられて思はず苦笑した次第でしたが、これがお芝居の方と話すと全然私などは後輩中の後輩であつて、この間も南座で事務員の方に、私が前の梅玉や雀右衛門を知らないといひますと、貴方まだそんなにお若いのですかと云はれて失笑しましたが、私は此處で歌舞伎ファンと映画ファンとの年代の相違をハッキリと知ることが出来たのであります。本眞を云へば私達位の歳で歌舞伎ファンであることは餘りにも老若的で變則であるのかも知れません。然し私は歌舞伎の持つ超現實的なロマンティズムの魅力にどうしても打ち勝つことは出来ないのです。



## デスマスクに 感慨新しく 鷹治郎丈一週忌

その法要は白井松竹會長と遺族  
中村鷹治郎丈逝いて早一ケ年

の間に謙讓の美德を誦はれ劇界佳話と噂されてゐたが、一月二十九日正午菩提寺常國寺に於て行はれた。

せん未亡人、長三郎、扇雀、芳子、長二郎、敏雄等の遺族を初め延若、魁車に、故人の愛弟子等、松竹側より白井信専務、多田常務等參集、同寺住職葛井泰雅師の讀經あり、その位牌の前に飾られたデスマスクに焼香する人達の感慨は更に新たなるものがあつた。

私の好きな台詞 × × 次第不同

「雨月物語」

村田嘉久子

御申越の締切に日もなき事とて簡単に御返事致候

一、岡本綺堂先生の「雨月物語」の女房宮木を演りました時、私の好きなセリフが澤山にございました、その中でも「…月のある夜は月明りを便宜にし、暗き夜は暗きがまゝに、明るを待つて居ります」又「家を忘れ、女房を忘れ、我れを忘れて居る程の面白い處からお前はどうして歸へられました」この二ツのセリフは私の好きな處です、一ツは非常に淋しさを、そして憐れさを伴ふた詞ですし



一ツは恨み言としても優しく美しく言ひ現はされて居るからでございます。

「白浪五人男」

實川延若

台詞に好き嫌ひは有りません然し白浪五人男の連らねの台詞等は好きです。

「私は氣が多い」

坂東鶴之助

私の好きな台詞と尋ねられますと氣が多いのかハツキリと御返事申上兼ねます特別好きなと云ふのは別に有りませんが只今の歌舞伎ばかりでなく新作物洋劇物なんでも自分でやつて見たく歌舞伎と新派と云ふ様に役がらの性質によつてハツキリと台詞の云ひ廻し様を變へてやつて

見たいと前から思つて居ります。洋劇物の極新しい台詞又歌舞伎の時代物などはそれ獨特の味があり好き嫌ひは別にありません。折角のお尋ねに勝手な事を申して申譯ありません。

「冬木心中など」

片岡我當

一、冬木心中の平太郎の内の場で、叔母さんとの對話で友達を焼場へ連れて行く長せりふの件です。戯曲全集に有りますからどうぞ御読み下さい。

一、云ひ廻しでは近江源氏の盛綱の奥の長せりふの如何な心變せねどの件です

「好きな台詞」

山口俊雄

私の好きな台詞。サア何んでせうかね：『來年の今月今夜。一生を通じて今月今夜は忘れない。なアに忘れるものか、もし月がくもれば貫一は今夜の様に、何

# 八方寄書

處かで宮さんを怨らんで。泣いてゐると思つてをくれ。』金色夜叉。

『春雨ちやア、濡れて行かう。』月形半平太。この様な台詞はお客様がお芝居を御見物になつてゐられまして、ほんとうに、いゝ心持。いや都合では。一度御自分も、何處かでやつて見てもいゝなアと御思ひになる台詞の様に思ひますが。

サア、私達となりますと、舞臺に出ますと一生懸命になりますので、どれが好きな台詞か何にが何んだか、わからずやつてしまふ事が澤山にあります。然し立役にしても敵役にしても、舞臺に出ればその役その人物に成らなければなりませんからまあ私達は夢中ですね。樂屋に入つて來てからもその氣持がとれませんですから私は敵役でも立役でも、うまくいつて、つまりその人物になり舞臺に出て喋る時が、いゝ心持だし、好きな台詞

を云へる時です。

敵役、悪役をして、相手役を、ほん／＼とやつつけて花道かなにかに入る時は一寸いゝ心持ですなア。でもその時はお客様から憎まれますから。やつぱり立役か二枚目の役の方がいゝです。

河内山玄關先で、河内山が馬鹿メ、といつて笑ひながら花道に入る時などは私の好きな台詞です。

## 「書物よりは七五調」

市川松蔭

本年は稀有のお寒さの折柄に、錦地御一統様には、いよ々々御機嫌麗しき由、欣幸に存じ上げます。次に私し事、父（宗十郎）と共に再度お招きに預り参上いたしました。が、此度は東西合併青年歌舞伎一座をもつて、御招きに預り、初御目見得を致します事は、一座の光榮、私の譽れ此の上の喜びは御座いませぬ、其上何の役にも身に餘る大役のみ故、研究努力を重ね、奮勵の上勤めますれど、何

分にも不鍛練の者ゆへ、充分お叱りを願ふ事と、莫大なる観客を入れまする大歌舞伎座ゆへ、奮つて御見物を願ふ事のみが、念願で御座いますれば宜敷く御願ひ申上げます。次に私しの好きな役々々のお尋ね何も修行と存じて居りますれば、甲乙は御座いませぬが中でも好きと申ますれば、時代ものよりは純世話物、七五調でタンカを切る女白浪お松は、堪らなく好きで御座います、然しいくら好きでも、本物は眞平です、到つて臆病者ですから、この點はお含み置きを願ひます。

## 「たつた一人の女」

松本高麗九郎

一片柳の小旦那はわたし一人ぎりだ  
一片柳の小旦那も一人ぎりなら二本木屋の娘も一人ぎりだ世間が幾ら廣くたつてもう一人二本木屋の娘はるないんだ伯父さんそうでせう  
一 伯父さん／＼氣休めを云つて呉れる人はいくらも有りますよだが心底から

得心の行くことを云つてくれる人は一人もありませんおふくろは泣ひてるばかり、おやぢはこゝとを云ふだけだこの胸の内が成程と云ふやうな事は誰れもだあれも云つてはくれやしなひ、  
(泣く)

## 「二筋道」

藤村 秀夫

鈴村 ハ、、、(泣き笑ひ)

お喜代さん、私は嬉しい親類共は私を馬鹿だと云つてゐますが、人一人の誠意を酌みとる事の出来ない人間には、私が馬鹿に見えませう、だが、だが、此處に完全に人の誠意を受取る事の出来た人間には、何千何萬の金も決して惜しいとは思はれませんからねハ、

(瀬戸英一氏作「二筋道」より)

## 「好な台詞とば」

守田 勘彌

默阿彌作の中で人口に膾炙してゐる名台詞の多くは、ツラネであり所謂厄拂ひであるので、何れも美辭麗句を並べてある。これは俳優も観客も共に胸のすくやうな心持がする、玄關先の河内山、大川端のお嬢吉三等々がそれである。

が併し好きな台詞となると別である。自分が演ずる役——それが中心人物である場合自然脚本一篇——の眞實の性根を、端的に表現する台詞が好きである。例へば「時平公七笑」の幕切の獨白の如きで、また岡鬼太郎氏の「深奥三玉鬼横櫛」の大宮囃の名文句よりも、品川宿の「憎いと思へど春の夜の浪は木更津其まゝに變らぬ戀と打返す」といふ、短い台詞に興味を覺える。

いま自分が演じた役で一二の例をあげると、菊地寛氏原作林和氏脚色「忠直卿行狀記」詰の幕の忠直の台詞、

いや予はそちを手討に致す所以はない今其方が切てかゝつた事に依て予は全く二重の悦びを得たのじや、と申すは忠直が今一人の人間として他人から恨まれ殺されんとする事に依て始めて己れも人間の世界に入つたやうな氣がした、併し相手は六十七萬石の家中に於て打物とつては無双の噂ある其方が必死を盡した七首じや此勝負にまさる嘘偽りのありとは思ひもよらぬ、予が日頃の鬱懷は始めて此處に晴れたのじや與四郎予は其方に禮をいふぞ。

又今度上演のたつた一人の女の大詰、和四郎の台詞、

おえんが死んで足掛三年似てゐる女を探して歩くそれが今じや俺の仕事よ、股旅者には恰度いゝやな、今吉さん越前三國で遊んだ男がおえんにそつくりの女がゐると教へてくれたのが始まりであつちこつちと似た女を漁つて歩いたがみんな違はあ、たつた一人の女は三千世界に矢つ張りたつた一人さりだの如きである。

ハカキ寄書

# ハナキ寄書

## 「海鳴り」のお島

### 水谷八重子

「しがねえ戀が情の仇……」と羽左衛門さんが胸のすく様な名調子でたんかをお切りになるのを聞いて居りますと、うつとりする様な陶醉にひたつてしまひます歌舞伎ですとツラネなり厄拂ひなりサハリのセリフなり、すつきりしておやりになる方はさぞ好いお氣持だらうと思はれるセリフが澤山ございますが、私共が演じます現代劇では、そう云つた名セリフと云つたものはあまりございません。その代り演つて居りまして、本當に舞臺で泣いてしまふセリフがございます。この正月明治座で井上先生と久々に顔合せで上演し、お蔭様で大變好評を博しました龜屋原徳さんの「海鳴り」は、私の大

好きな芝居で、演つて居りますと本當に泣けてしまふのでございます。

私の扮しますお島と云ふ漁夫の娘は、許嫁の與助が航海に出て行方不明になつたのを、三年間歸りを待つて居ましたが家庭の事情でとう／＼他へ嫁入する事になつて、與助の両親にお別れに参ります然しあくまで與助は生きてゐて今に歸つて來ると信じ切つてゐる母親のお民から「亭主棄てどけエでも行くだ。私當子ひんごだ。」

と罵られると、

「母さ、そんな事云ふなら、與助さこゝへ出してくんなさろ。わしイほかへ嫁きたかねエだ。どこへも嫁きたかねエだ。さ、與助さ出してくんろ。父つあま、わし伊與助さに逢ひてエだよ。わしら許嫁しねえ前から、小つせえ子供の時からの仲よしだつた。父つあまの家さ來て、この圍爐裡端へ坐る度に、今にわしイこの家さ嫁に來て、この茶釜アついで、さ、父つあま、さ、母さちうて孝行するだと、どんなに胸

エ躍らしたか、そればかりが楽しみだつたこのわしでねえか。な、それに與助さの船沈んだちうて——父つあまわしイ毎晩／＼海さ向いて、與助さ歸してくんなさるちうて、一人で泣いた。昨夜だつて、わしイ何べん與助さの夢見て泣いただか、そ、それだに、母さちうたら、ひでエことばつかり云ふて……」

と云ふ處になりますと、胸が一杯になつて、ひとりで涙が出て参ります。

二月には一日から十五日間京都南座に引續いて十六日から八日間神戸松竹劇場に出演致し、この「海鳴り」を上演致す運びとなりましたから、お観客様と御一緒に舞臺で本當に泣けます事を楽しみに致して居ります。どうぞ皆様で御高覽下さいます様特にお願ひ申し上げます。

## 「陣屋なご」

### 澤村田之助

盛綱 サアその殺すなと御説故猶以つて

殺さにやならぬ

サア辨舌を以つて馴くるは北條殿小四郎を殺すなどの謎意は、生け置いて人質となし子を餌にかうて高綱を味方に附けんはかり事鏡に掛けて顯はれたり仲々心變ずべき弟高綱とは思はねども如何なる大丈夫も我子の愛着に迷ふは慣ひ萬が一この謀事に陥つて降参などの心附かば子故に不忠の名をけがさん事残念の至りよし左はなくとも小四郎がとりことなつて生きたる内は恩愛と云ふ大敵に高綱が弓勢も弱り双金も自然となまる道理迷ひの種の小四郎一時も早く殺しなば弟が義心も猶々鐵石これぞ兄弟弓矢の情とうて我手にかくる時は主君北條に背く道理幼な心にこの道理をわきまえ自身に切腹するならば我は油断の誤まり計り兄が義も立ち弟



が忠も立ち双方まつたき此の役目は御苦勞ながら母人様密かに小四郎に切腹させて賜はれかし、現在の甥が命申なだめて助けるこそ情とも云ふべきに殺すを却つて情とは

△情けなの武士の有様や

如何なればこそ兄弟は敵味方と引分れ今朝の矢分せにも敵は甥なり味方は我が子肉身と肉身の劍を合はす血汐の瀧修羅の巻の攻め太鼓胸に盤石こたゆるつらさ

△弓馬の家に生れし不肖コレ聞き分けてたべ

△母びとと (盛綱陣屋)

いがみの權太 おいとしや親仁様私しが性根が悪さ故御相談の相手もなく前髪のを首を物髪にして渡さうとは料簡違ひの危ない所梶原程の侍が彌助と云ふて青二才の男に仕立てある事を知らいで討手に來ませうか、それと云はぬは彼

方も企み維盛さま御夫婦の路銀にせんと盗んだ金重いを證據に取違へ、明けて見たれば中には首ハツと思へどこれ幸ひ、月代刺つて突き附けたは矢張りお前が仕込の首

彌左衛門 ムウ、シテその又根性で御台

若君に繩をかけなせ鎌倉へ渡せしぞ

權太 オ、そのお二人と見えたのはこの權太めが女房俵 (千本櫻)

ケ年三圓十三錢!

白面「道頓堀」を「年ケ一」  
樂し讀むとこが出來す

申込は 道頓堀編輯部

私の好きな台詞

×  
×



# 扇雀 我當 勘彌へ

高安吸江

今からザット四十年程以前で、今の羽左衛門がまだやつと家桶を繼いだ頃、その家桶に雷藏(？)幸藏、兒福などいふ顔振でたしか浪花座かと思ひますが、上野の戦争に笠森おせんや二人道成寺を演つたことがあります。成績は中位でしたが美しく可愛らしい家桶の外に幸藏と兒福で菊五郎(五代目)や新駒(今の歌右衛門)の影法師が見られるといふ興味が大阪の好劇家を引寄せました。

四昔の星霜は著しく人智を發達させ、見物の多くが理智的な劇通乃至は科學的な批評家となつた今日、そうした低徊趣味の芝居好きは殆ど皆無と云ふべく、扇雀、我當、勘彌等によつて彼等の先代を追憶するよりも、其先代自身、鴈治郎、仁左衛門勘彌に對してさへ鋭いメスを取つて解剖的批評が試みられやう

としてをります。

處が、東西合同花形歌舞伎などは到底何の魅力をもち得まいとの私共の豫想は、見事裏切られて昨年十一月南座の成功です。サア何か、彼等をそうさせたか。これは一考を要する問題です。遺憾ながら私は當時見物の機を得なかつたので、所謂その成功がどの程度を云ふのか、彼等の技倆が何位であつたかを確めることが出来ませんでした。

扇雀はとにかくとして、我當は一昨年の春秋平家物語に瀧口武者正秀、ひばり山で廣嗣を見たゞけ勘彌は先頃の義經位です。イヤ此判官は歌右衛門なんかになれば頗る曰く附の役ではあります。勘彌としては是だけで判断するのは無理でしやう。

同様に近く親を亡くした此兩人が青年歌舞伎を組織したその



三周年紀念興行は去年の春催され、六月は一日替の忠臣藏で其役々について少からぬ苦心が費された結果、四方から非常な讃辭を浴せられたとか聞きました。扇雀は此間「腕久」を演つたので大體見當がつかますが、要するに彼等三人共今日の處、いづれも皆立派な青年で、所謂一番鎗を競ふ花々しい若武者であつて、大將の賞目や器量を彼等に望むのはまだ其時機でないことは明かです。

名優の袖にかくれて安逸を貪る時機が過去つたこと、一方其羈絆から解放せられて自由の身となつた事、伶俐な彼等は此れを自覺しない筈はありませんから従つて、獨立するに足るべき自個建設への努力が考へられ、又一方是まで熱望しながら許されなかつた役々を演じ得る感激と、ともに、恵まれたる生理的條件、即ち彼等の若さによる美容や體力、此等の總てが融け合つて特種の魅力となり、爲に一切の短所が蔽はるゝのみならず、一般観客から共鳴せられて意外の成功を贏ち得たものと思はれるのであります。

それで私は此際彼等三人の人達に注意したいのは、彼等が今日の成功は氣であつて藝でなく、熱であつて力でないことを心から理解し、決して慢心を起さぬことです。是まで若い人々のために種々の企がありました、どうも長續きしません。そ

の原因の一つとしてこうした誤解が敷へられ、しかもそんな場合がかなり多かつたと云ふことです。洵に心すべきことと思ひます。

猶彼等に對する世評の中で、彼等があまり多方面で、達者過ぎるとか、或はまた上すべりで腹の力が足りないとか云はれる點について一言します。成程惡の達者とか、薄ッペラな藝は無論斷乎として排斥すべきですが、さりとてまだ青年の彼等に向つて其先代に見なれた「力」を要求するのはあまりに無理ではありませんか。

今日の彼等は出来るだけ各方面の役々を研究し、古今諸名優の型や諸先輩の教示を心から理解して此れを實地に試み、並々ならぬ先人の苦心はもとより、表面平易に見えた諸役が如何に難しいかといふ點に至るまで、盡く體驗して其眞價を鑑別し得る様、一生懸命に奮闘するのが唯一のとるべき道であります。斯く敬虔の心をもつて長い年月不斷の努力を怠ることがなければ、眞の力は自然と生じそこに始めて個性ある藝がうち立てられて天晴一代の名優と稱せられるのであります。

私はここに、名優への第一歩をふみ出した彼等三人の將來を祝福すると共に、今回の二月興行の幸多からんを心から祈る次第であります。

編輯後記 村上 勝

◆早春二月の關西劇壇——歌舞伎座の東西合同の若手歌舞伎は濺刺たる舞臺を見せ、南座は井上、水谷のよきコンビになる堅陣、中座の家庭劇、角座の關西新派續演、浪花座は久々に辻野一座が歸阪しての活躍である。

◆本誌も各座のその陣容に随つて編輯したのであるが、先づ、今月は鷹治郎なりこまやの一週忌に當るので、日比繁次郎氏に、鷹治郎なりこまやを中心とし、故名優の逸話などを執筆して頂いた。

◆活躍の若手歌舞伎の人々へは高谷、森、菱田、高安の諸先生が玉稿を寄せられ、それ

々々鞭達せられてゐる。井上正夫氏が珍らしくも女役をするその「海鳴り」に就いては、作家の龜屋原氏が、特に本誌のために寄稿せられた。

◆都築文男氏の特輯讀物は、興味あるものとして、非常な賞讃を賜つてゐるが、氏が、稽古、本讀みと多忙なかにも關らず、毎日御執筆下さることは編輯者として悦びにたへない。

◆作家訪問の第二回は、家庭劇の舞臺監督として活躍されてゐる山上貞一氏を特派記者が、丁度「舞臺」の劇作究研會の夜にお訪れし、種々お話を希つた。次回のペン行脚はどの方面へ往くか御期待下さい。

昭和十一年二月一日發行  
月刊『道頓堀』第十一年  
雜誌『道頓堀』第百十三號

◆誌代は前金でお拂ひを願ひます。  
◆郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。  
◆御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社  
大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金參拾錢 (郵錢五厘稅)

昭和十一年二月一日印刷  
昭和十一年二月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹興業株式會社大阪支店

發行者 島江 鎮也

共同編輯 山本 泰三

印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區久左衛門町八番地  
松竹興行株式會社大阪支店

發行所 道頓堀編輯部

あぶら取紙始礎 辻と添附

# スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉  
スキナ石鹼

鼻竇特許 審用新案

## スキナ御化粧紙

(あぶら取兼紙白粉)

各品共御愛用を乞ふ!

標商録登



大 阪  
發賣元 朝日堂株式會社  
大 阪  
本舖 中田スキナ屋謹製



昭和十二年十月廿五日第三種郵便物認可  
 昭和十一年二月廿一日發行  
 昭和十一年二月廿一日發行  
 昭和十一年二月廿一日發行

「道標」

第百十三輯 第十一年 二月

一部金參拾錢



音美めどきせ

# 固形淺田飴

感冒防げ

咽喉護れ!

本舖 東京堀内伊太郎  
 大阪

旅行、スキー、観劇、  
 講演會、其他人混中に  
 咽喉を保護し、呼吸器  
 病を豫防するに妙。

たんせき一切感冒  
 百日咳、咽喉の痛み  
 聲の嘎れ

(全國到る處の藥店にあり)

定 三十五圓  
 價 十錢

